

『きこえない』教師として『きこえる』生徒とともに —普通高校における「障害認識」の変化を追って—

原 康 夫

1. はじめに

普通高校における「きこえる」生徒は、「きこえない」人や「きこえない」教師をどのように受けとめ、どのように関わっていくのだろうか。

筆者は「きこえない」教師として高浜高校に赴任、8年が経過した。当初の、生徒間、職員間にあった「戸惑い」。これが出発点となって相互の「障害認識」がすすみ、現在は教師としてまた、人間として「対等」の立場で付き合っているというのが、筆者の率直な感想である。

本稿では、教職生活における自分の体験談を日記風に紹介する中で、自分も含めて生徒・教員集団が、どのように「障害認識」を深めていったかを考えてみたい。

2. 「障害認識」をはぐくむ本校の教育環境

福祉系列コースとして県下ではじめて設置された本校の「福祉教養コース」は、本年度で10年目を迎えた。「人にやさしい社会をめざして」をテーマに福祉教育の推進に力を入れていく中で、「福祉の高浜」「ボランティアの高浜」ひいては「手話の高浜」とまで言われるようになっていく。その背景には人的要素や教育課程、諸設備の充実などが挙げられる。本校の教育課程や実践活動の詳細については前回の研究報告書にふれたので、ここでは最近の動向について述べておきたい。いくつかのおもな動きをかいつまんでいうと、

- 1) ボランティア活動の活発化。参加生徒が年間延べ1000人を超える年もある。
- 2) 「ボランティア活動」を学校設定科目として設置。年間で1単位。生徒の自主的な活動を支援する。
- 3) 選択科目や総合的学習の時間に「福祉」関係を導入。これにより一般コースの生徒も広く学習、体験実習などにも参加できるようになった。
- 4) 新学習指導要領の実施に伴う、教科「福祉科」の設置。「福祉教養コース」の増単（10単位から14単位へ）
- 5) 福祉専門学校との提携によるホームヘルパー2級資格の取得（生徒希望者のみ）
- 6) 福祉教育に対応した多彩な教員、講師の配置。とくに障害のある教員、講師の存在。

こうした教育上の条件整備や実践の積み重ねが、本校生徒の「障害認識」をはぐくむ上での土壌になっているといえる。

3. きこえない教師の一日

1) 朝の職員打ち合わせ

隣の同僚に打ち合わせ内容をメモしてもらおう。同僚も手話ができるが、まだ片言程度。内容の正確さを期して筆談が主だ。それでも要約筆記だから、情報が一部抜けるとか発言者の言葉のニュアンスや感情がつかめなくて誤解することもある。今日もメモのうち、主語が抜けてしまって本来は職員間への連絡事項なのに、生徒への連絡事項と思い込み生徒に伝えてしまった。次の休憩時間に訂正の連絡をいれ、生徒にわびる。

さて、全体の打ち合わせが済んで次は学年の打ち合わせだ。この週の司会は私が当番。4分、5分と限られた非常に短い時間の中で司会をスムーズに進めなければならない。同僚の筆記ではおぼつかない。幸い、学年主任の同僚がろう学校を経験していて手話ができる。ろう学校独特の手話で読みづらいが、ほとんどリアルタイムで通訳してくれるので大いに助かる。その同僚も自分の発言には自ら手話で伝えてくれる。

2) 朝のショートホームルーム

教室へ急ぐ。筆者が担任する「福祉教養コース」のクラス1年F組は総勢39名。女子がほとんどだ。おしゃべり好きでちょっとうるさいが明るくて元気なクラスである。席に着かせるのに苦労する。入学当初の4月5月はみんなまじめに座って聞いていたのに。

それはある意味で入学の頃と比べると、現在のほうが人間関係的に深みが出てきたともいえるのかもしれない。当初は、私を障害のある人としてとらえ、「先生は話すのが大変だから聞いてあげなくちゃ」と構えていたかもしれない。それが今では、障害のあるなしの関係をすでに越えていて、自然な形でごく普通の付き合いをしているといったところか。

朝のホームルームはけっこう時間がかかる。出欠や連絡事項を伝えるのに、ほかの担任と比べて遅い。音声は不明瞭な分、繰り返したりすることがある。発音しづらくて生徒に伝わりにくい言葉とか連絡事項はつとめて板書する。手話も生徒に覚えてもらえるように随所に交えていく。となるといきおいスローペースにならざるを得ない。

生徒の中には「もうわかったよ、先に進めてよ」という生徒もいれば、逆にまだ理解できていない生徒もいたりする。まとめるのが大変だ。

入学当初、「わからなければ遠慮なく申し出るように」言っておいたのだが、遠慮がちな生徒もいて一人ひとりの反応は千差万別だ。相手の顔を見て事を進めるむずかしさを感じる。しかしそれは取り越し苦労であった。

生徒がお互いに工夫して情報交換しあっているのだ。

理解できていないクラスメートを周囲がサポートする。

「先生何て言った？何のこと？」

「ああ、先生はね〇〇〇のこと言ってるんだよ」

「そうか」「ふーん」

といった具合。

これから連絡事項を繰り返して話すことはもうよそう。生徒との協力体制があれば・・・おや、教科担当の先生が廊下で待っている。あわててHRを切り上げる。緊急でもない事

項は昼休みか帰りのHRにまわそう。いつも迷惑かけっぱなしだが、同僚もクラスの生徒もこちらのペースに付き合ってくれている感じだ。

3)○校時「美術」授業

美術室でさっそく点呼。呼ばれたら手を挙げて返事するように指示してあるのだが、声が不明瞭なために返事がなかなか返ってこない。再度呼ぶので手間がかかる。けれど今ではおおかたの生徒がこちらの声に慣れてきちんと手を挙げてくれる。欠席の生徒はクラスメートが手話で「休みだよ」と伝えてくれる。

最近生徒の手話人口が広がり、意思疎通もスムーズな場面が増えている。それでもコミュニケーションの苦手な生徒がいて苦勞する。以下はそういう生徒とのやりとりの一場面。

筆者 「このアイデアスケッチ何を表しているの？」

生徒 先生の声が聞きとれないのか、きょとんとしている。

筆者 「僕の言ってること、わかる？」

生徒 「うーん」と、わかったようなわかっていないような。

筆者 仕方なしに筆談する。「何を描いてるの？」

生徒 「……………」

筆者 「じゃあ この紙に書いてくれる？」

生徒 しばらく考え込む。言葉にならないのか、筆がすすまない。

筆者 (隣のクラスメートを巻き込んで)「イメージとか言葉が浮かばないんだね。友達と一緒に話し合ってみてごらん。何かわかったらあとで教えてくれない？」

生徒にとっても筆者にとってもこの場面ほどもどかしいことはない。きこえる教員の応援が必要なこともある。でもこのような場面はお互いの立場を理解するうえで大事な出発点だ。しんどい作業ではあるけれど、今後にしっかりとつなげておきたい。

終了のチャイム。一人の生徒が手話で「チャイム鳴ったよ」と告げてくれる。

4)○校時の空き時間

非常勤の手話講師2名がみえる。Aさんは地元のろう協会から派遣されてきたろう者で手話表現が実に豊かな方だ。もうひとり手話通訳士の資格を持つベテラン。さっそく打ち合わせにはいる。うちの担任クラスを火、木の週2時間、筆者も含めて3人が教える。いわゆるチームティーチングの体制だ。

手話を指導すること半年、基本的な会話がこなせるようになったところである。筆者がこのクラス担任で日常的に彼らと手話でコミュニケーションをとっているということもあるだろう。

本日の「手話」の授業に中学校の生徒さんが見えるので、そのグループ分け、展開方法などを打ち合わせる。お互い手話で打ち合わせる(当たり前のことだが)から、職員室の中でそのしぐさはけっこう目立つ。こちらはごく普通に打ち合わせているだけなのだが、とくに転勤してきたばかりの教員はこの情景にあっけにとられて目を丸くしている。彼らにとっては障害者理解の一步といったところか。

5) 昼休み

廊下で通りすがりの生徒が声をかけてきた、というより手をかけてきた。

「先生、バイト先でろうの人と話できたよ。手話で」

「それはよかった。何て話したの？」

「ファミレスでろうのお客さんに注文受けてね。はじめは戸惑ったけど、落ち着いて手話で話してみたら喜ばれちゃった。手話うまいねって。で、注文の際〇〇〇は手話でどうやればいいのか？」

このように、バイト先とかボランティア先での対応の仕方などを教えてくれという生徒の相談をよく受ける。なかには手話に力量のある生徒がバイト先の店長に見込まれて、「ろう者への対応」について従業員への手話指導を任されるというケースもあったりする。

本校での福祉教育の成果がこのように地域のなかで生かされるとは赴任当初、夢にも思わなかった。生徒にとっても地域に貢献しているという実感をかみしめていることだろう。

6) 午後「手話（社会福祉援助技術）」の授業

今日は隣の町から中学校2年の生徒さん7名がこの「手話」授業を体験しにこられるというので、事前に次のようなプリントをクラス生徒に配って準備にあたらせた。

< 1年F組配布プリント >

M中学校生徒さんとの体験交流について

11月〇日の「手話」授業にM中学校の生徒さん7名位(中学2年)が見えて、F組の皆さんと体験交流することになっています。それで皆さんには今まで習った手話を使って、中学生に手話を教えてあげてもらいたいと思います。

時間は40分ほど、中学生7名が1人ずつ皆の各グループに入って学習する形を考えます。先生はよほどのことがない限りノータッチです。自力で教えられるようにがんばって下さい。

今回はグループ分けと、どのように教えるかを皆で話し合っておいてください。ちなみにこの中学校はうちのクラスSさんの母校です。丁寧にかわいがってあげましょう。

仕事

- ①グループ分け 今日うちに。 5～6人位 < 記入欄スペース >
- ②教える内容 (あくまで例です。中学生の興味に合わせるのがよいでしょう。)
1. いろいろなあいさつ < 記入欄スペース >
2. 自己紹介のしかた < 記入欄スペース >
3. 私の趣味 あなたの趣味 好き嫌い、得意なこと苦手なこと。 < 記入欄スペース >
- その他、中学生に教えてあげたいこと < 記入欄スペース >
- ③グループ内で、教える仕事をみんなで分担しましょう。
- ・司会 < 記入欄スペース >
- ・どの内容を誰が分担して教えるか < 記入欄スペース >

中学生が数名見えた。さっそくグループに一人ずつ入ってもらおう。中学生は最初緊張し

た面持ちだったが、福祉コースクラスの明るい雰囲気ですぐ打ち解けてもう和気あいあい。「君、名前なんていうの」「いい名前ね、手話でこう表すの」と自己紹介の仕方からはじめる正攻法のグループもあれば、たまたま同じ中学出身のクラスメートがいて「ねえ〇〇先生は元気？あの後輩ははどうしてる？」などと母校の話に花を咲かせるグループも。こういった会話から手話表現できそうな単語をひろって教えている。

中学生に手取り足取り教えること約30分、ぎごちなかった動作は次第にこなれてきたようだ。後半は中学生に皆のまえて一言何かを手話で発表してもらうことにした。ろうのA先生と筆者の二人に向かって意思が伝わるようにも頑張らせる。

さすがに中学生は覚えが早い。自分の趣味、学校のこと、部活などをけんめいに表現する。表現につまずく場面があると、前で見守っていたクラス生徒が「こうやるんだよ」と助け舟を出す。

教員とのコミュニケーションでも伝わらなかった部分を質問しては正しい手話を教える。その中で内容をお互いに確認していく。

おかげで中学生は、聴覚障害の人と意思疎通できた喜びをクラスの生徒と共に分かち合っていて帰っていった。中学生の素直で懸命な態度をみてあらためて思う、障害者福祉や技術を教えるのに当の本人、つまり障害のある人が担当したほうがよい。健常者の立場で教えていると気づかない部分や教育効果の発揮できない部分が、障害のある人だと説得力をもって生かされてくることのあるからだ。

後日に中学生グループから礼状が届いた。

7)〇校時 1年の「総合的学習の時間」

この学年の年間計画は大別して「福祉」と「地域」の2つがテーマになっている。週に1時間、クラスごとの展開だ。「福祉」についていえば次のように編成されている。

ある〇組の一例

4月 ①オリエンテーション ②コミュニケーションゲーム

5月 ①「福祉」についての説明 ②車椅子体験2時間

6月 ①手話体験1～2時間 ②白杖アイマスク体験2時間

9月 ①シニア(高齢者擬似体験)2時間 ②「福祉」のまとめ

(10月以降は「地域」をテーマとした展開)

そのうち「手話体験」が私の担当だ。今日教えるクラスは一般コースなので福祉教養コースにあるような「手話」「点字」の授業はない。生徒にとっては今回が初体験。「手話」は1クラスにつき1時間か2時間しか展開できないので、真剣勝負だ。

まずはあいさつから始める。

「コンニチワ」

しかし、こちらの手話表現を見て手を動かす生徒はまばらだ。はずかしいという気持ちの先に立っていて手が動かないようだ。生徒を何人か指名し教壇に立たせ、実際に会話のやりとりを体験させる。

「君の名前は?」「趣味は」「年は」「好きな食べ物は」「得意な科目は」などと質問する。手話の単語が思い浮かばないといっておろおろしている。

手話の体験というとみんな、「手話」だけでしか通じないものと思込んでしまっているようだ。こんな場面には手話だけでなく身振り、口話、筆談、空書など方法があるんだよと説明してやる。すると彼らは肩の荷が下りたように身振り、空書などで体を動かし始めた。やればできるもの。硬くなっていた表情もゆるんで「自分でもできそうだ」という顔つきに変わっていった。それから「へえー」「なるほど」「マジ」「ウッソー」「わかった」「わかんない」などの手話も教える。それを会話の中におり込んで使わせる。

筆者 手話で「きみ 恋人いるの？」

生徒 「恋人」の手話をみて「コレ」「ナニ？」

筆者 「恋人」をゆっくり空書する。

生徒 首をたてに振って「うん」

筆者 手話で「へえーいるの」「すすんでる」「いいなー」「彼の名前何ていうの？」

生徒 先生の手話が読み取れず、先ほどの習った手話で「わかんない」「もう一度」

筆者 再度ゆっくりと表現する。まだわからないところを繰り返し伝える。それでも通じなければ空書で。

生徒 わかったらしく恥ずかしくていやというしぐさをする。

筆者 「やだ」という手話を教える。

生徒 手話で「やだ」 (クラス大笑い)

筆者 手話で「レンアイ」「ガンバレ！」

生徒 「レンアイ」の手話を自分でもまねて「コレ ナニ？」

生徒は、ろう者の会話にも自分たちと同じような世界があると知って共感しているようだ。最後にろう者の生活について次のような話を生徒に聞かせた。

「数年前に起きた東海村の臨界事故を知っているか。え、知らない？まだ小学生だったから無理もないね。東海村といえば原子炉で有名なところ。あそこで放射能が漏れたんだよ。工場の事故でね。電車も止まったし住民も逃げ出した。そのくらい大規模な事故だったんだ。で、そこにいたろう者はどうなったと思う？」

(生徒しばらく無言、だれも思いつかない。そこで、聴力障害団体発行の「緊急通報ろう者に直接伝わらず」の見出しがおどっている記事のコピーを生徒に配布する)

「記事のタイトルを見ただけで想像できると思うが、近くにいたろう夫婦は何も知らなかったんだよ。そのまま買い物に出かけてしまった。町に出てもスーパーへ行っても誰もいない、がらんどろだ、どうもおかしいと手話で言っていた。家に帰ってみると息子さんから外には出るなというファクスが。テレビをつけてもアナウンサーは口をパクパクしているだけ。臨界事故というタイトルは流れていてなんとなく緊迫感が伝わってくるのはわかる。が、そもそも臨界ってなんなんだ？こうしてろう夫婦は対策のとりようがなく、無為の時間だけが流れてしまった。外では行政の車がサイレンを鳴らし緊急放送を流すだけ。つまりろう者だけが置き去りにされてしまったんだよ。幸い身体に支障はなかったが。も

し放射能を浴びていたら・・・ぞくっとするね。皆さんはどう思う？」

あとで生徒に感想文を書かせたが、この授業の締めくくりとして次のような問いかけをした。

「この問題はろう者だけの問題だと思う？私は、みんなにとって自分たちの問題だと思う。社会全体の問題なんだよ。君たちは親によってまた地域の人によって生かされここまでこれた。つまり地域になりながらお陰で今の自分があるんだと思う。これからは君が地域に対し何ができるかを考えてみてほしい。端的に言えば、近所にろう者がいたらどうするかな？あるいは隣にきこえないクラスメートが座っていたらどうするかな？また君も歳を取ればいつかは人の世話になるということもあるだろう。かくいう僕もきこえない人間として、またきこえない教師として周囲の人々にずいぶん世話になっている。だから僕はその世話になった分の、できれば倍以上のお返しをと思っているんだよ」

8) 帰りのショートホームルーム

さっそく、クラスへ連絡事項を伝える。万が一のことも考えて重要な事項は板書する。なかなか伝わらないところはリーダー格の生徒がこちらの気持ちを察し、代わってみんなに伝えてくれる。するとあちこちから質問、意見がとびだす。

「先生、明日の時間割間違ってるよ、授業変更だもん」「来月の予定表まだ？」「入学式は出なくていいの」等等。手話、口話、身振りなどあらゆる手段を使って攻めてくる。自分勉強、生活に関わるようなことは何が何でも把握しておかなければあとにさしさわる。というわけで、「えっとこの手話どうやるんだっけ」と他のクラスメートに教えてもらいながら質問する者もいれば、ずうずうしく手話部員のクラスメートを通訳に立てて交渉する生徒も。生徒側も必死だ。こうして入学当初のぎごちなかった会話のやりとりが、日を重ねるにつれて上達していく。会話の密度も深まった。手話の語彙力、コミュニケーション能力が着実に身につけていることを生徒は実感しているようだ。なかなか上達しない生徒も何人かはいるけれども。

生徒の質問に答える中、一人の生徒が割り込む。

手話で「センセー、アタシ、バイト、トチュウデ、カエツテ、イイ？」

4. 生徒の障害者に対する認識、行動の変化

1) 入学当初の障害認識

入学当初の生徒が「障害児・者」をどのように受け止めていたかをアンケートしてみた。大きく分けて、①交流・接触がなく未体験、または交流・接触はあったがあまり関わりを持たなかった ②幼少時から交流していた、の2つに分けられる。両方の「障害認識」に差異を認めるが程度の問題であり、ほとんどの生徒は表面的な理解、同情的な態度をとるにとどまっているようである。

- ① 交流・接触がなく未体験、または交流・接触はあったがあまり関わりを持たなかったグループ

- ・障害を持った人のことなんてよく知らなかったし、高校に入ったときは何に関して
も手助けしてあげなきゃいけないものと思っていた。
- ・ちょっとこわいなあと思っていた。どうやって接していいかわからなくて視覚障害
の方に席を譲ることもできなかった。
- ・子どもの時から障害者に対して正直なところかなりの偏見があった。今思うと障害
者に対しての知識、理解不足が原因だと思う。
- ・知り合いにダウン症の人がいて、幼い頃から接していた。正直言って障害がはつき
り理解できなくて、障害者の方がこわかったです。
- ・その人が自分でできる範囲まで手伝ってしまっていた。それは自分がしてあげてい
るという意識があったからだと思う。少し過保護というか、気を使いすぎていたか
も知れない。

② 幼少時から交流・接触していたグループ

- ・小さいときから障害の方と接する機会が多々あったので今とあまり変わっていない
と思う。
- ・小学校の時に、盲学校ろう学校が隣にあって学校全体の交流をやっていた。だから
特別扱いはしていなかった。逆に障害のある子が明るかったり話をしても楽しかっ
たりだったから。
- ・どんな障害者でも普通の一般人と同じように接しているし、変な目でみたことはあ
まりないです。
- ・私が小学生の時にクラスに耳の不自由な子がいて、その子とはよく遊んだりしまし
た。担任の先生にも「いつもお世話してくれてありがとうね」って言われたことも
ありました。だからその時教えてもらった手話・指文字も少しだけだったけど覚え
ています。

2) 3年後はどう変化したか

生徒は、本校で3年間福祉や手話などの学習、施設実習、ボランティア活動などを取り
組み、障害児・者に対する障害認識を深めていくが、それはどのように深められているの
だろうか。以下は福祉教養コース3年生の感想文である（一部抜粋）。一般コースにおい
ても福祉方面で実践活動している生徒も状況は同様と考えられる。

- ・今は普通に接することができる。それに社会的には“弱者”とされているけれど、
精神的には彼らほど、強い人はいないと思うようになった。
- ・今では深く考えていない。できることを助ける必要もないし、「もし助けてほしい」
と言われた時に手を貸せばいいことなだけだと今は思う。
- ・様々なボランティア活動や講演会を通して障害者に対する知識、理解不足は解消さ
れ、彼らと交流することによって「自分と同じなんだ!」という気持ちになりました。
3年間で大きく人間的に成長したと思う。
- ・高校に入る前の説明会で、原先生が先輩と手話で話をしているのを見てワァーすご
いなと思っていました。今実際に原先生と手話で話ができすぎてすごく嬉しいです。日

常生活の中で障害のある方と生活をする事の大切さを教えてもらったと思います。

- ・障害者に対する考え方の変化もたぶん、原先生がけっこう影響していると思っています。高校で人間として成長した私に影響を与えてくれた人だと思っています。

5. 「共生」をうながす「障害認識」 —まとめにかえて—

「総合的学習の時間」の授業でのことである。ひとりの生徒が小学校の時からきこえない子とずっと親しかったというので、教壇に立たせ筆者との会話を試みた。驚いたことに彼女のコミュニケーション手段はキュードスピーチであった。実にあざやかというか、流ちょうな使いぶりでこちらが感心してしまうほどだった。手話と違い、キュードスピーチは記号的な側面がつよく言語とはいえないが、彼女が小さいときからきこえない友達とあいう雰囲気でも自由に会話を交え、一緒に伸び伸びと遊び回っていたであろうことは想像に難くない。

本校のある平塚市にはろう学校、盲学校、養護学校などが点在しており、他の町と比べると障害児の学校は多い方である。街に出てみると障害のある方や子どもをよく見かける。筆者自身も買い物の際に店の人に親切にされた経験をよくしている。きこえない人とわかればそれなりの対応をするのだ。いふならば、障害のある方とともに地域における「障害認識」を深める作業をしているとでもいおうか。さきのキュードスピーチの生徒も、こうした地域の「共生」の取り組みに支えられ生かされて育ったのだらうし、また本校生のバイト先での手話による応対やボランティア先での活躍ぶりも地域の「共生」づくりに貢献しているといえる。

本校内を振り返ってみても、障害のある生徒が数名、教員にも聴覚障害のほかに視覚障害や肢体不自由の方もおり、生徒には「障害認識」を深める上で生きた教材になっている。一例として、自分の障害を理解してもらおうと入学直後から在校生やクラスに自分を積極的にアピールする生徒も出てきている。

最後に、生徒が深める「障害認識」は見方を変えれば健常者側が障害者を理解する上で自分の壁（障害）を取り除く作業をしているともいえる。生徒のこうした作業は今までみてきたようにさまざまな形で周囲の生徒を巻き込み、あるいは家庭へ地域へと輪を広げている。こうして障害者に対する偏見が取り除かれ、それが「共生」づくりにつながっていく。一方で、障害児・者側が深める「障害認識」は自分の障害を卑屈に感じることなく積極的に肯定していくというところにあるが、そのためには健常者側の「障害認識」による支援が欠かせないものと考えられる。

それを示唆する資料として少し長くなるが、本校生徒2名の感想文を紹介して本稿のまとめとしたい。

「私の小学校はろう学校との交流があって、けっこう小さい頃から障害者との交流をしていた。でも何を話したらいいのか、わからなかったし唸っていたから話の通じない人だと思っていた（低学年時）。小学3、4年の頃にろう学校を見学した。ろう学校の高学年の人を見て驚いた。その人は障害者だが自分より大きくて大人に見えたからだと思う。障害者はずっと小さいままでずっとこのままでいるんだと思っていたかも知れない。その人は

大人みたいにしゃべっていたし、ふるまいかたも大人だった。ちょっとしたカルチャーショックだった。中学の時、家の近所にろう学校や盲学校ができたせいか、ふつうに道ばたで白杖を持った人たちが歩いていたりしてコンビニに入ってもふつうに買い物している姿を見ていくうちに、それがふつうに思えてきた。高校に入ってもそれは変わらないけれど、精神的に私より大人だなあと思った。私にとって障害者は大人っぽいというのがいつも私の中にある」

「今回のアンケート（障害認識に関する質問）は私にとって、とても複雑なものでした。高校入学から今日までの3年間、私は先生のことを障害者だと思ったことがなかったからです。ろう学校の方々との交流会、地域作業所への実習、ボランティアへの参加と3年間イロイロな事をしてきましたが、障害を持っている人と接した後は、必ずと言っていいほど私は生きていく勇気もらったような気持ちになりました。

私は高浜に入るまで、障害者は遠い存在だと思っていました。私の周りの人も、何の興味も持っていなかったのですが、私が体験してきたことを話すと家族や友達が熱心に聞いてくれるようになりました。そして何より驚いたのが、母の兄妹に知的障害を持った人がいたということです。私は高校に入るまで全然知りませんでした。知らないというより気がつかなかったのです。母に聞いた時は驚きました。そんなに身近に障害者がいたのに、何も気づかなかった私は本当に知識がなかったのだと思います。でも、父が私に知的障害を持った叔父の事を相談してくれた時は本当に嬉しかったです。こんな言い方をしたら叔父に失礼なのだと思いますが、なんだか、自分のやっている事が認められたような気がしたからです。きっと父も母も私と妹が気にするのではないかと気を使っていたのだと思いますが、私が高浜の福祉コースに入学する事を母に反対されていたこともあり、うまく表現できないのですが、今ではなんだか少し両親の気持ちがわかり安心しています」